

相国寺旧境内・上御霊遺跡 発掘調査広報発表資料

2020 年 4 月 21 日

株式会社 文化財サービス

所在地：京都市上京区相国寺門前町 709 番地

調査期間：2019 年 11 月 27 日～2020 年 4 月 30 日（予定）

調査面積：1,822 m²

1. はじめに

本調査地は相国寺旧境内および上御霊遺跡に該当します。

萬年山相国寺は、臨済宗相国寺派の総本山であり、室町幕府第三代将軍足利義満によって永徳 2 (1382) 年に開かれた寺院です。現在相国寺に現存する、天明の大火以降の絵図によれば、調査地は相国寺旧境内の北東部、塔頭「却外軒」敷地内の北部にあたると考えられます。また、調査地の北西約 200m に位置する上御霊神社境内は出雲氏の氏寺とされる出雲寺跡に比定され、近隣で実施された調査成果から、調査地が山背国愛宕郡出雲郷域に含まれると考えられます。

2. 調査の成果

今回の調査では、近代に構築されたと考えられる石組みの禁裏御用水、戦国時代の濠状遺構、区画溝、礎石建物、鎌倉時代の区画溝、白鳳時代～奈良時代の竪穴建物、掘立柱建物が検出されました。

近代の遺構

調査区東端部において、幅約 2.0m、長さ約 25.0m にわたって南北方向の石組み溝を検出しました。検出面から遺構底部までの深さは北で約 0.7m、南で約 0.85m を測り、底の一部には石敷きが確認されました。これは、賀茂川を水源として、調査地の南方に位置する御所へと水を引き込むために設けられた水路である禁裏御用水と考えられます。禁裏御用水は、琵琶湖疏水を直接御所へ送る御所水道が明治 45 (1912) 年に完成したことに伴い給水が廃止され、その機能を停止しました。遺構内には近代のものと考えられるガラス瓶をはじめとした塵が多量に堆積していました。また、石組みの裏込め内からも近代の遺物が出土したことから、この石組みは早くとも明治期に構築され、御用水が機能を停止した明治 45 年以降は芥溜場になって埋まっていったと考えられます。

戦国時代（16 世紀）の遺構

調査区南東部で礎石建物 1 棟とそれに伴う溝 0041、調査区中央部で東西方向の濠状遺構 0039、L 字状の溝 0275 を検出しました。

礎石建物は柱間 3.9m、梁間 3 間、桁行 4 間以上の南北棟と考えられ、北東角に位置する柱穴 0091 には原位置を保っていると考えられる礎石が残存していました。また、柱穴 0049 からも礎石が検出されましたが、こちらは原位置から移動しているものと考えられます。これらの礎石は柱穴 0091 のものが直径約 0.6m、厚さ約 0.4m、柱穴 0049 のものが直径約 0.7m、厚さ約 0.4mを測ります。

溝 0041 はこの礎石建物の北側に走る東西溝で、建物に伴う遺構と考えられます。溝の幅は約 1.0m、東西長は約 18.0m、検出面から遺構底までの深さは約 0.5mを測り、東西両端で南に折れ、約 5.0m延びて止まる「」形の平面形を呈します。遺構内には瓦が多量に包含されており、礎石建物の屋根に使用されていたものが、建物廃絶時に廃棄されたものと考えられます。

濠 0039 は調査区中央北寄りで検出した東西方向の濠状遺構で、幅約 2.0m、検出面から遺構底までの深さ約 1.2mを測り、断面形状は台形を呈します。東端部は禁裏御用水以東には延びないため、御用水と交差する地点で止まっていたと考えられます。また、西端は調査区西壁際にある南北方向の攪乱によって破壊され、底部が僅かに残存しているのみでしたが、その形状から調査区西端部で南に折れて延長すると考えられます。

溝 0275 は調査区中央西寄りで検出した L 字形の溝で、幅 1.2m、検出面から遺構底までの深さ 0.15m～0.5mを測ります。南北方向部分は調査区外へ抜けて南へ延び、東西方向部分は西へと延びています。

これらの遺構埋土に包含されている遺物は何れも戦国時代に比定され、遺物上の時期差は認められませんが、堆積状況から、礎石建物、溝 0041 が最も新しく、ついで濠 0039、最も先行するものが溝 0275 と考えられます。

鎌倉時代（13 世紀）の遺構

溝 0145 は溝 0275 の西側で検出した L 字形の溝で、幅 0.5m～1.0m、検出面から遺構底までの深さ約 0.4mを測ります。南北方向部分は調査区外へ抜けて南へ延び、東西方向部分は東へと延びています。濠 0039、溝 0275 はほぼ正方位であるのに対し、当遺構は北で西へ振っています。

白鳳時代～奈良時代（7 世紀中頃～8 世紀）の遺構

掘立柱建物 4 棟、竪穴建物 9 棟が検出されました。

掘立柱建物は調査区南東部に位置し、柱穴の平面規模は 0.8m 四方で、検出面からの深さは 0.6m～0.7m、柱間は 1.8m、東西 3 間、南北 2 間分を検出しました。

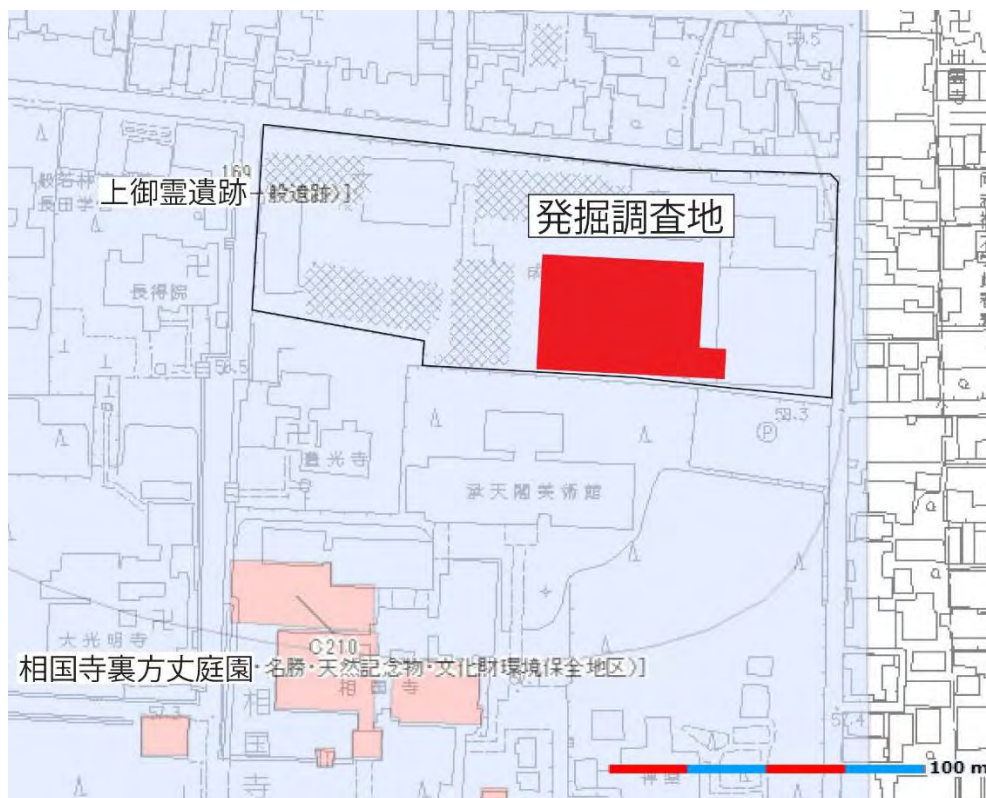
竪穴建物は、調査区北東部で 5 棟（竪穴建物 0164、0219、0363、0364、0468）南東部で 2 棟（0217、0218）西端中央部で 2 棟（0389、0421）を検出しました。これらは何れも完全な平面形を検出することはできませんでしたが、一辺 4.0m～5.0m の方形を呈します。検出面からの深さは、浅いもの（0219）で約 5.0cm、深いもの（0218）で約 25.0cmを測り

ます。また、0164、0219、0389 では竈の痕跡が検出されました。また、これらの竪穴建物は概ね北で西に振れるものの、0218 は東に振れており、必ずしも一定の方向になっていないことが判りました。これらの遺構群からは7世紀中頃～8世紀と考えられる土器が出土しており、上御霊遺跡に関わる遺構と考えられます。

まとめ

今回の調査地近辺では過去に複数回の調査が行われており、南に隣接する承天閣美術館増築に伴って2004年に実施された調査では禁裏御用水の遺構が土塁とともに検出されており、今調査で検出した禁裏御用水遺構はその北延長にあたります。既往の調査成果に加え、御所に関わる近代遺構に関する資料として、貴重な成果であると考えられます。

また、中世の遺構については、相国寺に関する建物と考えられる礎石建物に加えてそれに先行する濠と区画溝を複数検出しました。これらの遺構は、戦国時代のうちに存続と廃絶が起こったことが想定され、当該期における相国寺境内内の土地利用の一端を示すものと考えられます。さらに鎌倉時代の遺物を包含する区画溝を検出したことで、相国寺創建以前の調査地における土地利用を示す資料が得られました。また、白鳳時代から奈良時代に属すると考えられる竪穴建物および掘立柱建物が検出されたことにより、承天閣美術館増築箇所で検出された竪穴建物群、掘立柱建物とあわせ、調査地周辺に当該期の集落が存在したことを補強する成果を得ることができました。





禁裏御用水全景（北から）



禁裏御用水全景（北から）



禁裏御用水石積み（東側から）



禁裏御用水水面痕跡（東から）



中世 1（16 世紀前～中頃）全景（北側から）



中世 1（16 世紀前～中頃）全景（空中から）



礎石建物全景（北側から）



礎石建物全景（空中より） 礎石構築状況（右上写真）



中世 2（16 世紀前頃）全景（北側から）



中世 2（16 世紀前頃）全景（西側から）



中世 2（16 世紀前頃）全景（空中から）



中世 2 濠 (0039) 跡 (東側から)



白鳳時代から奈良時代全景（北側から）



白鳳時代から奈良時代全景（北側から）

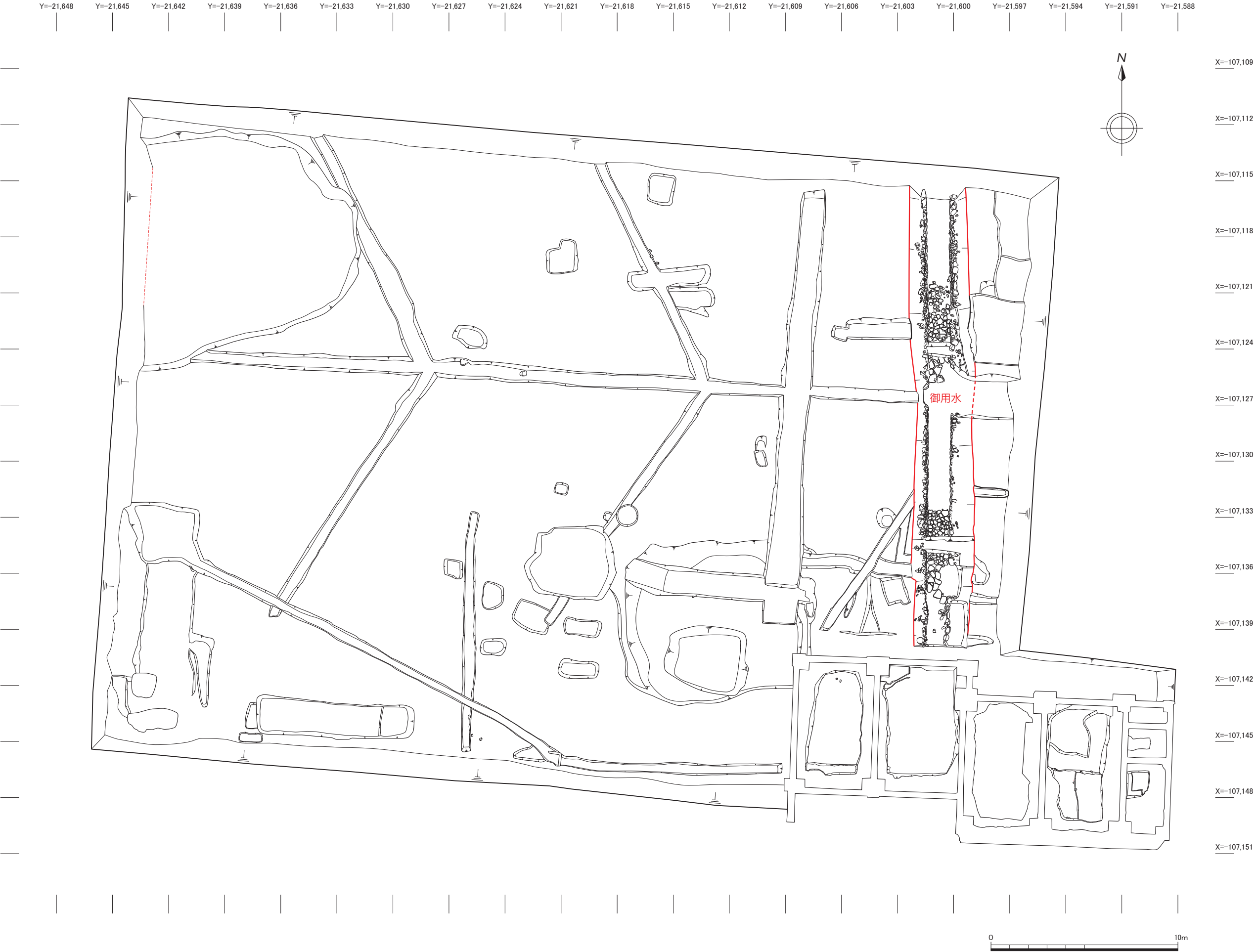


掘立柱建物（北から）

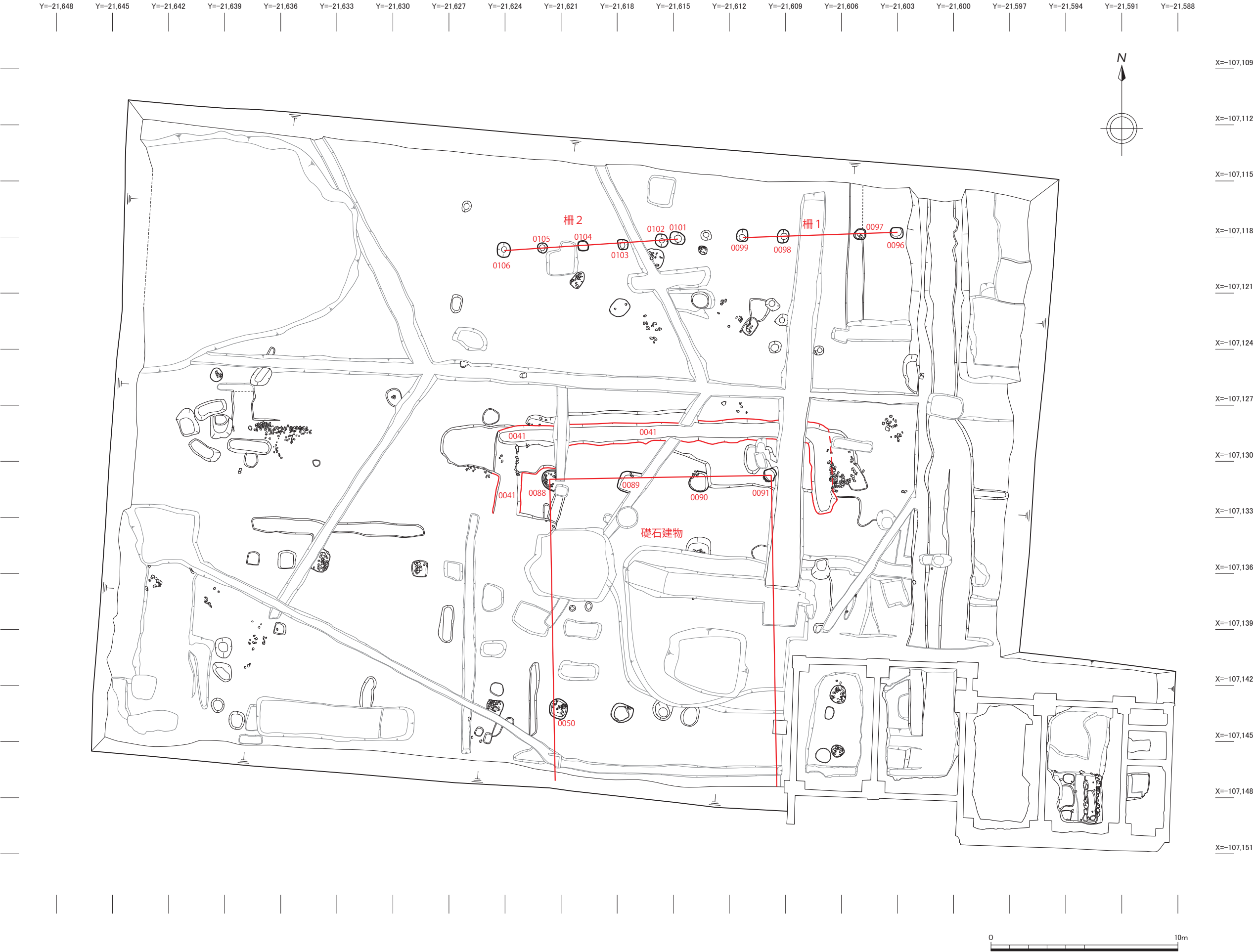


住居址 7、8（南から）

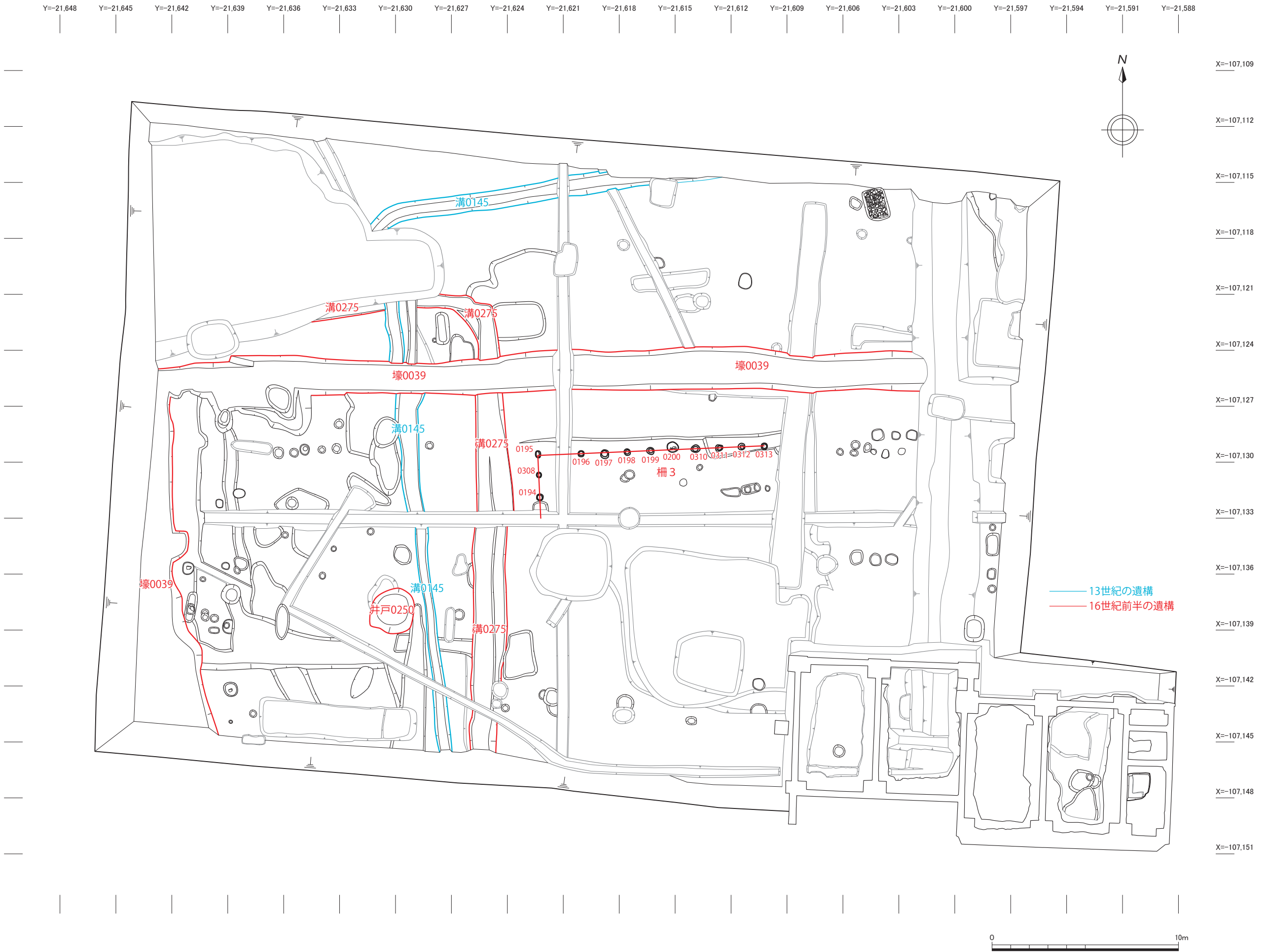
主要遺構の配置 (近代)



主要遺構の配置(16世紀中頃)



主要遺構の配置(13世紀・16世紀前半)



主要遺構の配置(7世紀中頃～8世紀)

